

京都大学人文科学研究所共同研究 最終報告書

1. 研究課題

科学的知識の共同性を支えるメディア実践に関する学際的研究

Interdisciplinary Study on Media Practices in the Collective Production of Scientific Knowledge

2. 研究代表者氏名

河村賢

Kawamura Ken

3. 研究期間

2022年4月-2023年3月

4. 研究目的

科学社会学や科学人類学における実験室研究の登場以降、科学知識の研究において「実践」の解明が重要な目標の一つとなっている。ラトゥールやウールガーらが切り開いた実験室研究は、あるローカルな場所で行われる科学的活動の結果が、どのようにして真理や科学的知識といった場所や時代に拘束されないより普遍的なものへと変換されるのかを明らかにするという方向性を示したが、こうした研究は科学を対象とする人文社会科学の諸ディシプリンの垣根を超えて探究可能な方針を指し示している。実際、シェイピン&シャッフアーの『リヴァイアサンと空気ポンプ』や、ダストン&ギャリソンの『客観性』は、科学研究における公開実験のあり方や科学アトラスにおける図像の用いられ方に照準することで、科学的知識の真理性や客観性への信頼がやはりある歴史的状況のなかから生まれてくることを論じた。本プロジェクトはこうした方向性を承け、科学者が自分の持っている知識や証拠を他者にも理解可能なものとして提示する際に依拠する様々なメディアの用いられ方を、学際的な視座から分析する。

Laboratory studies pioneered by Latour and Woolger have demonstrated the potential of investigating how products of scientists' local and collective activities are transformed into objective knowledge applicable beyond specific time and place. This topic can be pursued in broader fields of social studies and humanities. In line with this interdisciplinary perspective, our study focuses on how various media are employed to produce, transform, and distribute scientific knowledge.

5. 研究成果の概要

2022年7月には人文研アカデミーとの共催で「実践としての科学認識：『客観性』『ラボラトリー・ライフ』を読む」とする公開書評セッションをハイブリッド形式で開催し、オンライン参加者を含め130名を越える盛況となった。またこれらの書評セッションやその他定例研究会の成果として、出版社のウェブサイトや商業誌において関連する論文などが発表された。

6. 共同研究会に関連した主な公表実績

人文研アカデミー「実践としての科学認識：『客観性』『ラボラトリー・ライフ』を読む」
吉川侑輝「天才と出会う——サリエーリとモーツァルトの対話」

(<https://haruaki.shunjusha.co.jp/posts/6835>)

岡澤康浩, 2023, 「書記技術のマテリアリズム：ブリュノ・ラトゥールのメディア論のために」『現代思想』51(3): 264-274.

7. 研究成果公表計画および今後の展開等

定例研究会で行われた研究発表は、今後各自が自らの領域における代表的な学術誌への投稿を見据えて、論文化を進めていく。また来年度以降の『人文學報』に、今年度の研究班課題を総括するような小特集と個別の投稿論文を掲載するべく、準備を進めていく。